

見知らぬ家路

黒井千次

見知らぬ家路

黒井千次

昭和四十五年十月一日 第一刷

著者 黒井千次

発行者 桼原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号一〇二

電話東京(03)二六五局一二一一

振替東京七八七四三

精興社印刷、中島製本

定価六八〇円

© 1970 Senji Kuroi

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします。

Printed in Japan

目次

赤い樹木

5

首にまく布

51

椅子

73

へS∨でのたくらみ

97

見知らぬ家路

129

闇の船

211

装
幀

岡
本
半
三

見知らぬ家路

赤
い
樹
木

木立K子——。この奇妙な少女がはじめて部屋にはいつて来た時のことは憶えていない。もし彼女が一人でふらりと俺達の部屋に来たのだったら、閉じられたままのドアの中から滲み出したようにしてそこに立っているのが一番ふさわしかったろう。しかし、そうではなかった。木立K子は、一日のうちの正確に三分の一を俺達と共に過すためにこの部屋にはいつて来たのだったから。

最近、会社は新入社員に対してばかりに気をつかいはじめた。両親同伴の入社式というのもそうだったし、式後のこれから配属される課長と机をはさんでの昼食会というのもそうだ。会食が済んだ後、馬でも渡すように親から引渡された彼女を、手綱をもってひくようにして課長が俺達の部屋までつれて来たのだらう。

気がつくと、俺の前に彼女は立っていたように思う。課長は、もっともらしく俺達に彼女を紹介したに違いない。少し舌の短い口を無理に動かして。何によらずもっともらしいことを大げさにするのが好きな男なのだから。俺はその時、なんと言ったか——。ただ、これは確かだと思うのだが、木立K子は浅黒い顔の中にはめこまれたような口をむいて俺を見てから頭を下げたが、

決して「どうぞよろしく」等とは言わなかったのだ。いや、じっと俺を見るだけで頭さえも下げなかったのかもしれない。それから、彼女は友田友之のところにつれていかれて、課長と三人でしばらく話をしていたように思う。友田友之は俺より若いくせに、木立K子の新入社員指導者を命ぜられていたのだ。もっとも、若いといっても課長である島根哲郎にしても俺と同期の入社なのだから、本当は若い彼等に責任があるのではなく、若くないのにうだつのあがらぬ俺の方に問題があるのかもしれない。

それから、ここから俺の記憶はひどくはつきりしたものになるのだが、課長は彼女を俺達のスチールデスクから少し離れたところに置かれている会議机につれていった。島根課長は、そこでこの少女にわが課の業務説明を始めたらしかった。彼の流儀に従ってどうせもっともらしくやるのなら、その席には当然新入社員指導者を命ぜられている友田友之も同席する筈なのに、彼は呼ばれていなかった。もっともらしいやり方というものは、いつでもこのようにひどく自分勝手なところがあるものだ。俺はこの部屋への久しぶりの新入社員である木立K子の後姿をぼんやりみていた。あれは四月だった筈だし、ビルの中には暖房がはいっていたに違いないのに、木立K子はなぜか赤いオーバーを着たままだった。赤といっても朱色に近いその燃えるようなオーバーの中で、彼女の身体は成長し過ぎてしまっているように見えた。だから彼女のオーバーを着けた後姿は、赤い樹木を坐高の高さに切りとったようにずんどうに見えたのだ。課長の説明とは関係なく、ただリズムカルに頭だけを動かしながら、彼女は片手でキャンパスのような布で作ったかかえかばんの中から筆入れをとり出していた。それは、蓋が弁当箱のように上にとれる、オーバー

の赤をもっと黒ずませた色のセルロイドの筆入れだった。彼女は音もたてずにその蓋をすっと開けた。俺は思わずのびあがって筆入れの中身をのぞきこもうとした。突然会議机の上に開かれた赤い筆入れは、俺が住みついているこの部屋のものではない、何か異質の強烈な匂いを放ったようだった。懐かしいとか、頬笑ましいとかいうのとは違ったほとんど不気味な感触をその筆入れは持っていた。蓋をとったまま、生理的要求のように頭を小刻みに動かし続け、彼女はその中の鉛筆にも、消しゴムにも手をのばさなかった。赤い筆入れの蓋をとる、ということが、まるでこの部屋にはいつて来た木立K子の挨拶のように見えたのだ。オーバーの後姿に目をやったまま、俺はどのようにして彼女に挨拶をかえせば良いのかわからなかった。仕方なく、机の上にあった煙草をひきぬいて火をつけたが、あれた舌に煙は痛かった。考えてみれば、机に坐って吸いたくもない煙草に火をつける、というのが、いかにも俺らしい挨拶の返し方だったのかもしれない。

木立K子の机は、友田友之の横、つまり俺に背をむけて俺の前ということになっていた。一年程前から、机の配置は課長との対面集合体スタイルから一斉に背面管理方式に切り替えられた。

一番偉い奴（つまりこの部屋ではそれは部長と呼ばれる男だったが）が壁際に壁を背にして坐り、各課長が部長に背をむけてその前に坐り、以下、各課員が課長に背をむけて職級の上のものほど後ろに位置して坐る。背後から管理することになったわけだから、それ以前にくらべて、後姿というものの持つ意義がきわめて重要になった。この方式が採用された年は、入社試験の面接も受験者に壁をむかせて背後から質問したという噂もあった程だ。それはともかく、木立K子が俺の前に坐っているということは、背面管理方式の原則からいって、その背面を全面的にひきうけて

いる俺が彼女を管理する責任を持つ、ということにもなる筈だった。新入社員指導者の友田友之は、いわばサイドから彼女を指導するためにその横に位置するらしかった。とすれば、「管理」と「指導」とはどちらが優先するか、という問題になる。答えは簡単だ。「管理」が優先するのだ。理由も簡単だ。その方が俺に都合良かったからだ。なぜか木立K子は俺の興味をそったのだから。むずかしい問題や、わからないことにぶつかったときは、「何が自分の利益になるか」を考えてみる——これが俺のやり方だ。そうすれば大てい問題は解決がつく。何が利益になるかわからない場合は、何が不利益になるかを考えてみる。それでもわからなければ、そんな問題は大きな問題ではないのだ。鉛筆でも倒してきめれば良い。

俺は、誰に命ぜられたわけでもなかったが、木立K子を管理する決心をした。

二日目から、木立K子は入社した最初の時だけ無償支給される灰色の上っぱりを赤いオーバーの上に着こむようになった。上っぱりのサイズがMだったらしく、それはなんとかボタンをかけられてはいたが、後ろから見ると真中のひだが苦しうにいっぱいに開いていた。まだ新入社員指導者から適切な指導がないらしく、机に坐ってもぼんやりしている木立K子のはりつめた背を、俺は定規の先で強く突いた。部屋中がふりむいて見る程奇妙な声をあげて、彼女はくると俺の方をむいた。とび出した白眼の部分がほとんど水色に見える綺麗な大きな目で、彼女は怒ったように俺を見た。あんだ、その赤いオーバーを脱がないのか、と俺は低い声できいた。

——寒いんだもの。

驚くほど素直な声で彼女は答えた。それは、ただ寒さだけをひたすらに訴える透きとおった声

だった。そんな声を、俺はまだこの部屋の中できいたことがなかった。そのことが俺をあわてさせた。あわてると、俺はたいていの場合失敗する。

——オーバーの下は裸か？

冗談とか、からかいというのではなく、その声に引き出されるようにして思わず俺はききかえたのだ。冷静に考えてみれば、これはいかにも薄汚れた中年男の質問だった。

——見せようか。

彼女はいきなり首もとまであるオーバーの赤いボタンに手をかけた。

その手の動きがすぐ止ることを予想しつつ、それでも俺は素直にうん、と答えていた。赤い襟元のボタンは三つまではずされ、その下にピンクのセーターがあらわれた。着てるじゃないか、と言いかえそうとした時、彼女の男のような大きな長い指はセーターの肩にあるピンクの小さいボタンを首をすくめるようにしてはずし始めていた。暖かそうなセーターの肩の前面が皮がはがれるようにして前に倒れた時、その下に白いポロシャツがあらわれた。セーターのあいた部分からこじいれた手で、彼女はポロシャツの前のボタンを下から二つ迄はずして俺の方に顎をあげた身体をさし出した。

——ね。

ポロシャツの間から、切手程の大きさの首筋というよりは意外に白い胸の上部がのぞかれた。その下の端に、純白の別の衣類がちらりとのぞけるように思われたが、それについては俺はもうきこうとはしなかった。

——そんなに着ていて、寒いかね。

俺もなんとなくワイシャツの袖をひっぱりながら、彼女にききかえした。

——寒いよ、ここは。

念を押すようにそう言くと、彼女は今はずしたボタンを下からすばやくはめながらくると前にむきなおった。最後の一言を言った時、彼女の吐く息がはっきりと白かったことにしばらくしてから俺は気がついた。どうすれば君は暖かくなるんだ、という質問を、俺は彼女と同じように素直な声で彼女にむけてぶつけたかった。忙しそうな振りをした友田友之が「業務分掌規定」とか、部内の業務に関する機能図等というものはいった、およそ実際に役にたったことのないフアイルをかかえて席にもどって来なければ、あるいは俺はそうしていたかもしれない。木立K子が物を食うところを見たい、と突然激しく俺は思った。

木立K子が入社してから、俺の煙草の量は俄かにふえ始めたようだった。この両者の因果関係がどうなっているのかははっきりしなかったが、その結果俺の胃袋が黄色く疲れてしまった感じでいつも重く身体の中に垂れ下り始めたのは事実だった。胃の具合が悪くなると、会社の昼食は悩みの種だった。朝はパンと牛乳で適当に処理出来たし、夜は時間をかけてさがせば疲れた胃袋にも程良い食物を外食することも出来たし、決心さえすれば帰ってからカラカラに乾いている電気釜に水をいれて柔らかな飯をたたくことさえ出来た。昼はそうはいかない。一時間のうちに、飯

を食う場所に到着し、飯を食い、適当な食後の休養をとり、更に会社まで歩いて帰って来ていなければならぬのだ。仕方なく、俺は昼休みのチャイムと同時に部屋をとび出して、少し離れたガード下にある小さなおでん屋まで走るようにして出かけて行った。どういうわけか、胃の具合が悪くなった時、そばやうどんを食うと必ず余計に俺の病状は進むのだ。そんな時、だから、俺は病んだ猫が片足を高くあげて一心に自分の尻の穴を舐めるような気持ちでおでん屋に急ぐことになる。一杯の茶飯と、大根、ハンペン、豆腐、ちくわ、これだけ食うと百九十円の昼飯になる。良く噛んで、俺は一生懸命にそれを食う。少し胃袋が恢復して来ると、それにさつまあげか、ごぼう巻きを追加する。二百三十円になる。ふくろを食いたくなかった時は、もう胃袋はほとんど恢復しているのだ。その時はハンペンを止めてしまう。二百五十円。俺は百九十円の段階にあった。それを食って腹がかなりきつくなった感じがしたのだから、まだ具合は良くなかった。何年か前までは、部屋でお花見に行こう、等という話が出る季節の筈なのに、乾いた風が強く吹いて寒かった。俺は背広のボタンを二つともかけて、熱いおでんを入れた胃袋を大事にかかえるようにして前かがみに会社にもむけてもどりはじめていた。十二時を三十分程過ぎたところだったから、まだまっすぐ帰るには少し早かったけれど、特に行きたいところもないし、なにしろ寒かったから俺は仕方なく部屋にもどろうとしていたのだ。国電の線路から離れ、都電の広い道を渡ってむかい側の歩道を歩き始めた時、俺は目の前を歩いている赤いオーバーの後姿に気がついた。内側にいっぱい身体がつまってしまった感じのその背中、たしかに木立K子のものであった。足を早めて追いつき、そのまま声をかけようとして、俺は念のために顔をたしかめてからにしようと思いと

どまった。横にまわりこむようにしてのぞいた顔は、しかし両手におおわれていた。浅黒い顔をしっかりとおおっている大きな長い指をもつ手に見覚えがあった。顔をおおったまま、彼女はかなりの速度で風の中を前かがみに歩いていく。

——見えてるのか。

俺は横からいきなり声をかけた。

——見えないのよ。

前をむいて歩き続けたまま、彼女は顔も動かさずにそう言った。

——つかまるかい？

少しいたずら気分をまじえて、歩きながら俺は彼女に肩を寄せた。

——ありがと。

もう枝ばかりと思っていた並木から、はっきりと一枚の黄金色の葉が降って来たようだった。声と同時に、彼女の大きなしっぺりした手が俺の肩にかかっていた。目が痛いのか、と俺はききかえした。小さな尖ったものはいっちゃんたみたい、とそれでも歩みを少しゆるめながら彼女は言った。とってやらねばならぬ、と俺は思った。一度行ったことがあるが、決して好きではない妙に人工的な感じの強い喫茶店がすぐそばの新しいビルの一階にあった。俺は彼女を黙ってそこにひっぱっていき、やっとみつけた二つ並びの空席に坐らせた。店の中には、深刻めかした女の太い声で歌われているシャンソンらしい曲が流れている。両目にはいったわけではないだろう。ウェイトレスにコーヒーを注文してから、俺はまだ顔をおおっている彼女の両手を掴んでそこか